昭和七年八月以降に於ける

滿洲の掃匪と治安の狀態

昭和八年二月四日
陸軍省調査班

0007281000

0007281-000

６４４－７９

昭和七年八月以降に於ける滿洲の掃匪と治安の状態

陸軍省調査班・〔編〕

陸軍省調査班

昭和８

ABH

644-79

目次

一　緒言……一頁
二　昭和七年八月以降滿洲に於ける義勇軍の概況……二
三　九月以降に於ける關東軍の掃匪……三
　一　八月下旬に於ける反滿軍及匪賊の狀態……三
　二　九月上旬に於ける關東軍配置の概要……四
　三　關東軍の討匪經過概要……五
四　支那の對日滿策……一〇
　一　支那の抗日策動……一一
　二　支那の義勇軍組織と失地回復計畫……一二
五　熱河及北支方面に於ける反滿軍竝支那軍の情勢……一八

一　概　說……一八
二　熱河省內の軍情……一九
三　張學良の對熱河軍事行動……二一
六　結　論……二二
附圖第一　滿洲國要圖
附圖第二　熱河及北支方面反滿軍並支那軍配置要圖

昭和七年八月以降に於ける滿洲の掃匪と治安の狀態

一　緒　言

昭和七年三月一日滿洲新國家建設後日尙淺きにも拘らず、國礎既に固く、機構逐次備り、產業亦其緒につき、殊に日滿議定書締結以來は、治安の維持と相伴つて益〻之を促進し、庶民は皷腹して新政を謳歌し、其前途洋々たるものあるは、唇齒輔車の隣邦の爲はたまた東洋平和の爲、洵に慶賀すべき事と謂はねばならぬ。而して斯くの如く新國家建設後短時日の間に健全なる發達を遂げし所以のものは、滿洲國民が其建國の理想に勇往邁進して、理想境を顯出せんとする努力に依る所であるが、他面我が關東軍の將兵一同が、深く東洋平和の擁立に對する皇國皇軍の使命を刻銘し、奮鬪以て治安の維持に努めつゝあるに因る所多しと謂はねばならぬ。

此關東軍將兵の奮鬪努力は、今や殆と所在の兵匪を殲滅して、和平將に近きに來らんと

して居る。

左に其概要を記述する。

二　昭和七年八月以降滿洲に於ける義勇軍の概況

昭和七年夏季に於ては、南滿各地は一時匪賊義勇軍の活動猖獗を極めたが、我が關東軍の活動に依り之に大打擊を與へたのと、時漸く高粱刈取期に入り、彼等の跳梁を困難にし、加ふるに刻々として迫る寒氣は全く其戰意を失はしめ、義勇軍の積極的活動は大體に於て其跡を絶つの狀況に在る。

即馮占海、宮長海連合軍の如きは、吉林省中部より遠く熱河省に遁入し、南滿各地に於ては歸順を申し出づるもの續出するの狀態である。

北滿に於ては、九月下旬呼倫貝爾に於て蘇炳文張殿九の叛亂があり、之に呼應して黑龍江省中原の馬占山系軍隊、及匪賊の活動を見たが、關東軍の討伐後大なる活動を見ざるに至つた。

以上の如き狀況であるから匪賊の數も本年に至つては頗る減少し、昨年八月二十餘萬を以て算へしものが、目下は其三分の一以下に減少して居る、滿蒙和平の爲洵に喜ぶべきことである。

三　九月以降に於ける關東軍の掃匪

馬占山討滅後關東軍は、既定方針に從ひ一定の計畫のもとに逐次討伐を實施した。而して皇軍將兵の奮鬪努力により、著々として其成果を擧げつゝあるは、滿洲國の爲將又東洋平和の爲、洵に慶賀に堪へない所である。

一　八月下旬に於ける反滿軍及匪賊の狀態

八月下旬に於ける反滿洲國軍隊の主なるものは、除景德の指揮する反滿洲國軍隊、及丁超李杜の指揮する反吉林軍である。前者は兵力約五千であつて、黑龍江右岸漠河より黑河を經て綏濱に亙る間の地區に、後者は兵力約一萬であつて、牡丹江以西の地區に蟠居して居た。

義勇軍は約八萬で、其主なるものは東邊道、東支東線、及遼西地方に散點し、所在に盲動し、其他約九千の大刀會匪と紅槍會匪が、東邊道及一面坡附近を中心として活動して居た、他に約二萬内外の舊來より存在せる馬賊が、主として南滿洲鐵道沿線兩側地區に亙つて散在し、蠢動して止まなかつた。

以上の兵力總計は既述の目星しき者に、所在の小匪賊を合算して、二十萬を越ゆる狀態であつた。

二　九月上旬に於ける關東軍配置の概要

九月當初に於ける關東軍配置の概要は次の如くである。

（略　ス）

各隊は、前記の地區の守備に任ずると共に、所在の兵匪の討伐に任じて居た。

三　關東軍の討匪經過概要

一　吉林方面

吉林方面に於ては、九月五日夜李海青の率ゆる千五百の兵匪が、安達站に襲來したが、同地守備隊は之を擊退した。當時吉林陶來昭間の松花江左岸に多數の匪賊が横行して居たので、軍は之が擊滅を期し、姫路仙臺の兩部隊を以て、九月九日行動を開始し、各々當面の李海青一派の敵匪を攻擊し、九月十日より數日に亙る戰鬪に於て、莫大なる損害を與へた。

此間我討伐網を潜つて、東支南線西側地區に脱出せし兵匪に對しては、飛行機及一部歩兵部隊を派遣して之を追擊せしめ、至る所に之を擊破した。而して十月一日には、また しても李海青匪約千五百が昂々溪に侵入したので、同地守備隊は之を擊退したが、翌二

日中山支隊は大興東方地に於て李海青匪約三千を捕捉し、其主力を附近の沼澤地に壓迫殲滅した。又松花江下流方面に在つては、九月中旬李杜の指揮する兵匪が屢〻來襲したので、中村支隊をして該兵匪の根據地たる勃利附近を掃蕩せしめた。中村支隊は、十月中旬概ね之が掃蕩を終つた。而して二十七日約二千の兵匪寧安を襲擊したので、同地守備隊は之を邀擊し、多大の損害を與へて四散せしめた。其後引續ける討伐に依り、李杜は本年一月に至り遂ににに露領に遁入して武裝を解除せられた。

二　黑龍江省方面

黑龍江省方面に於ては、九月下旬呼倫貝爾に於ける蘇炳文の反逆があつた。之に伴ひ同省方面樸炳珊麾下の兵匪、竝叛軍の行動漸次活氣を呈し來つたので、十月八日中山支隊は富拉爾基附近に於て約二千の叛軍を、平田支隊は安達站附近に於て約三千の匪賊を擊破した。

十月二十日以來優勢なる叛軍が、泰安鎭を包圍したので、直に增援を派遣し、十一月五日之に殲滅的打擊を與へた。克山方面に於ては兵匪は、十月下旬屢〻襲來したが、同地守備隊は之を迎擊して潰走せしめた。

此他諸所に於て所在に敵を擊滅し、十二月初旬に於ては、該方面の匪賊は、殆と平定せらるゝに至つた。

三　東邊道方面

東邊道方面は、九月中旬約一千の匪賊撫順に來襲せし以來、匪賊の活動頗る盛であつたので、關東軍は騎兵旅團及歩兵約一旅團を以て、該方面の掃蕩を企畫し、諸隊は十月十日行動を開始し、十一月初旬概ね該方面の平定を終つた。本討伐以來兵匪の歸順するもの多く、該方面に於ける首魁たる丁超の如きも、本年一月に至り歸順を申し出づるに至つた。

四　南滿鐵道沿線及遼西方面

當方面に於ては、特に大なる匪賊の活動なく、苟くも蠢動を見るに於ては、直に出動之

を擊滅するので、概ね平生であつた。

五　呼倫貝爾の兵變

呼倫貝爾地方に根據を有する蘇炳文一派は、豫てより黑龍江新政權に不滿を有して居たが、張學良一派の使嗾により、九月二十七日海拉爾滿洲里等に於て騷亂を起し、滿洲國關係者、竝本邦人を監禁し、次で十月一日呼倫貝爾の獨立を宣言し、更に四日通電を發して反滿洲國の態度を表明した。關東軍は、本事變が局地的兵變なると、解決の手段の如何は直に邦人生命の安危に關すると、第三國との關係機微のものあるとに鑑み、勉めて和平的交渉に依り、問題の解決を計らんとしたが、蘇炳文は我が軍の好意ある調停を却け、其兵力を漸次興安嶺東方地區に集結し、挑戰を敢てするに至りしのみならず、嫩江右岸に於ける張殿九の反滿軍隊と提携するに至つた。

此間當局は、滿洲國及蘇國を通じ、政治的交渉に依り邦人の救出に努力し、稍〻曙光を認めたが、遂に全邦人を救出するに至らず、玆に於て關東軍は、遂に武力解決の手段に

出づるに決し、齊々哈爾附近に、概ね步兵八大隊、騎兵二旅團より成る部隊を集結し、十一月二十九日三方面一齊に進擊を開始した。

皇軍の向ふ所無人の境を行くが如く、各〻當面の敵を擊破して、十二月六日其先頭部隊は滿洲里に進入し、監禁せられて居た邦人を救出した。

而して蘇炳文及其部下約三千は露領に遁入した、本作戰以來該方面の治安は概ね平生に歸した。

以上記述せる所は、討伐作戰中の主要なるものであつて、此他小匪賊の討伐の如きは、八月以降「百八十回」以上の多きに達して居る。而して滿洲に於ける匪賊は、皇軍數次の討伐に依り其活動著しく不活潑となり、歸順するもの多く、熱河を除く奉天、吉林、黑龍江、興安の諸省に於ては、最早大なる匪賊の活動を見ず、殆と平生狀態に歸しつゝあるは、洵に喜ぶべき事であつて、滿洲の建設作業は之に依つて益〻容易となり、其豐富なる資源の開發と共に、產業の勃興期して待つべきものがある。

四　支那の對日滿策

關東軍の討匪作戰は、既述の如く順調なる經過を辿り、滿洲國內は靜謐に歸しつゝあるが、尙未だ滿支國境、及熱河省に於て、治安の維持全からぬものがある。此原因は一に支那側の對滿態度の如何にあるので、彼の政策態度の概要を知る必要がある。

蓋し所在の兵匪なるものは、何等確固たる定見あつて反滿抗日に出づるのではなく、其殆と全部が支那側の煽動に乘り、其操縱のもとに軍費兵器若は糧食の援助を受けて、治安の攪亂に妄動して居るのであるからである。

支那側が斯くの如き行動に出づる表面の名目として、滿洲の奪回即ち宗主權の恢復を叫んで居るが、日に月に整ひ行く滿洲國の相を見るに及んでは、其到底成就すべからざるは自明の理で、現時支那政權の首腦者も、內心には既に觀念して居るもの丶如くではあるが、彼等にはまた彼等の立場があつて、目下支那に於て、抗日を叫ばざるものは非國民なるかの如く罵られ、自らも從來抗日を公言して民衆を煽動し來つた面子もあり、今にして和協を口にするが如きに於ては國賊視せられ、反對黨に乘せられて失脚の危險大なるものがある。

かて丶加へて支那政局の混頓狀態は、抗日救國の名目のもとに、辛くも統一せられあるの狀態であるから、其程度に差異こそあれ、今後も相當彼等の擾亂の手が伸びるものと謂はねばならぬ、殊に昨年末南京に於て開催せられた三中全會の決議以來、積極的抗日に出づる模樣が顯著となつた。

一　支那の抗日策動

昨年十二月八日の、山海關に於ける我が裝甲列車に對する不法射擊事件に引續き、本年一月初頭に於ける山海關事件の突發等、年末より年始にかけ、滿支國境方面に於て、事態急なるものあるは世人の知る所である。

蓋し斯の如きは、前述せる支那の抗日策動の顯れであつて、彼等は之に依り抗日に出づると共に、其得意とする宣傳により、外國の干涉を呼び、若しくは國際聯盟の空氣を好

轉せしめ、以て自國に有利なる解決を求めんとする奸策であつて、其狀寧ろ憫然たるものがある。然しながら彼が大兵を集中して我に挑戰し來るに於ては、且は滿洲國内の治安確立の爲且は我が自衞の爲斷然たる處置に出でざるを得ないのは當然であつて、其責其曲共に彼にあり、帝國は東洋平和の爲に破邪の劍を揮ふに何の躊躇を要せんやである。

二　支那の義勇軍組織と失地回復計畫

一　蔣介石及張學良は、從來相協力して義勇軍の整頓に努力し來つたが、昨年兩者が漢口に於て會見の際、積極的抗日の方策を採るに決したものゝ如く、鋭意兵力の整頓整備に著手し、滿支國境方面に對し義勇軍の增加編成に努めた。殊に昨年末南京に開催せられたる三中全會に於ては、張學良に失地回復の大權を附與し、極力之を後援するに決したので、其狀況は益〻顯著となつて來た。

是れより先張學良は、義勇軍の指揮統制に關して考慮して居たが、最近に至り北平に在る遼吉黑民衆後援會、東北民衆抗日救國會の組織を擴大充實し、義勇軍を十軍團に區分し、義勇軍の軍費は之を救國會に申し出で、救國會にては選考の上後援會に通達し、後援會は調査の後、其採否を決定する如く定めた。而して義勇軍其者は、救國會を經て張學良の意圖の如く行動するも、給養關係は蔣介石(南京政府)及華僑其他國民政府關係の者が、之を管掌することに決した。

而して新編成に依る十軍團は次の如くである。

第一軍團	彭振國
第二軍團	王化一
第三軍團	唐聚五
第四軍團	劉桂堂
第五軍團	劉振東
第六軍團	熊飛

第七軍團　何清明
第八軍團　馮占海
第九軍團　王德林
第十軍團　李海青

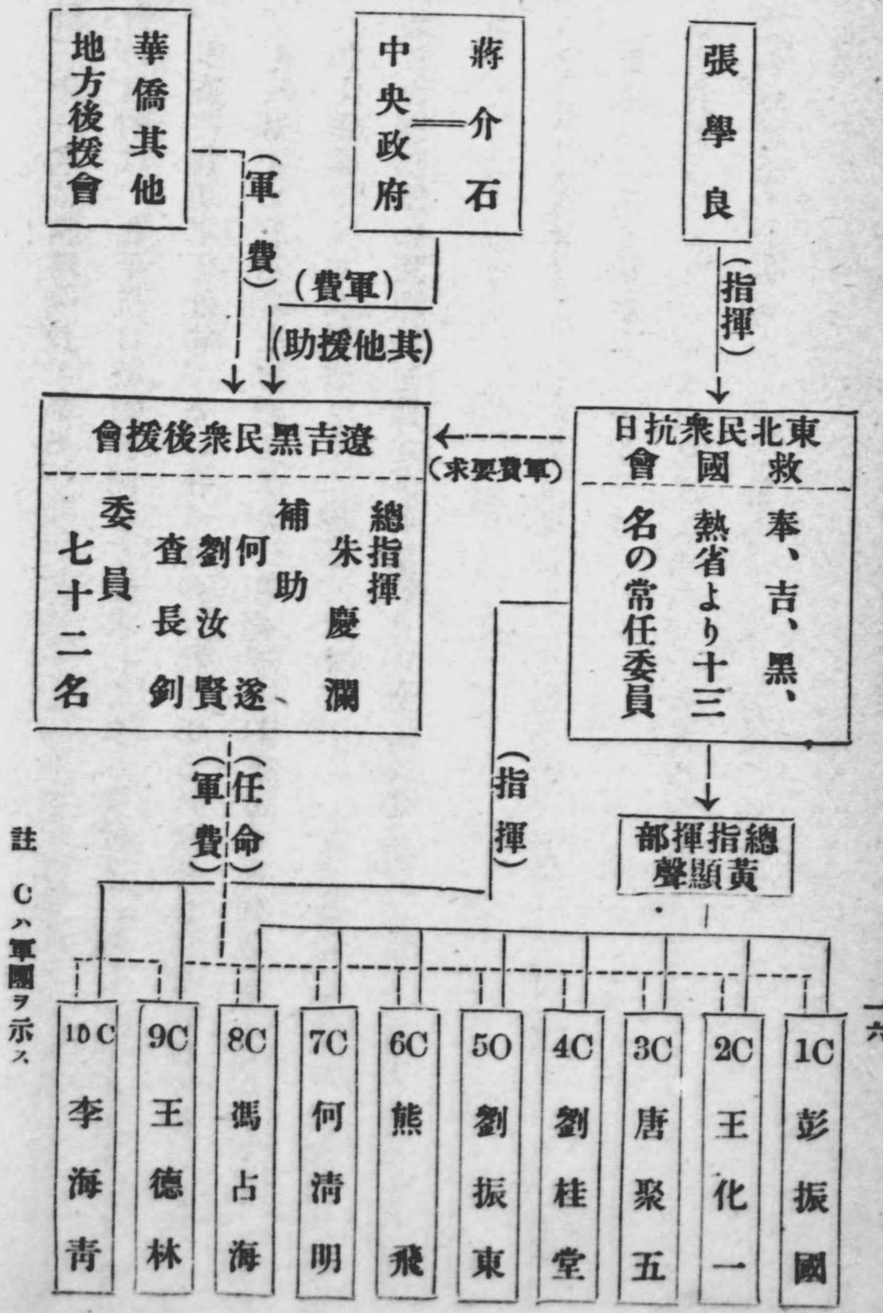
二　遼吉黑民衆後援會は、本年八月二十三日朱慶瀾が、蔣介石から義勇軍總管理者に任命せられ北平に到著した後、組織したるものであつて、當初は單に形式的のもの丶樣であつたが、上海及香港から送附して來た、相當額の華僑寄附金の多くが從來瞞著せられし形跡大なるに鑑み、南方華僑は疑惑を生じ、上海義勇軍後援會と連絡し、北平に在る朱慶瀾に對し、東北義勇軍後援會の確立を要望し來つた爲、十一月初旬組織の確立を見たものである。

該會總指揮は朱慶瀾であつて、補助指揮二名を置き、奉天省三十五、吉林省二十五、黑龍江省十一、熱河一、合計七十二名の委員を設け、其内奉天十五、吉林九、黑龍江七、合計三十一名は常務委員である。

該會の目的は、北平抗日救國會側より要求して來る交付金に關し、其正否を調査決定し、又直接義勇軍と連絡するに在るもの丶樣である。張學良は發言權を得んが爲、監督として部下の富占魁を推薦したが、拒絶せられ蔣介石系何遂(元孫岳軍長)が、蔣の命に依り派遣せられて監督として執務中である。

以上述べた義勇軍の新組織を圖示すれば、次の如くである。

義勇軍新組織概見表



三　蔣、張兩者が漢口に於て會見の際、相協力して作製せる東北失地回復計畫は、大體次の如きものである。

一　作戰兵力は、新組織に基く第一乃至第十軍團及蘇炳文軍等の全力を以てす。

二　作戰開始は、補給準備の完了と、日本軍の徹底的增兵討伐實行前とす。

三　主作戰は、齊々哈爾、哈市、新京、吉林を中心とする地帶にして、是等主要都市及鐵道の奪回を目的とし、支作戰を奉天以南鐵道地帶に導き、奉天奪取を目的とす。

四　熱河軍を豫備とし、熱河省は補給上の要點として豫め之を確保す。

五　北京及天津を補給上の要點とす。

右の如き計畫のもとに、年末以來逐次義勇軍を整備操縱して居るのであるから、該方面の治安の維持全からぬものあるは當然で、速に治安の恢復策を講ずるはことは極めて必要である。

五　熱河及北支方面に於ける反滿軍並支那軍の情勢

一　概　說

昨春滿洲國の獨立に際し、之に加入せる熱河省主席湯玉麟は、爾來滿洲國及張學良に對し、不即不離の態度を保持し來つたが、學良及中央の壓迫使嗾に依り、漸次反滿態度を表明するの已むなきに至り、最近に於ては、著々と反滿抗日の戰備を整へて居る。

又黑龍江、吉林及奉天各省の反滿軍の殘黨は、續々と熱河省に竄入し、在來の義勇軍と合流し、之等は張學良及中央の援助に依り、其編成裝備を充實し、熱河を根據地として、滿洲國中部の擾亂を企圖しつゝある。

而して張學良も從來は、其正規軍を以てする抗日軍事行動は、實行して居らなかつたが、對內關係及自己保全の必要上、遂に十二月下旬より其正規軍の一部を熱河に進入せしむるに至つた、偶〻一月一日山海關事件突發するや、急速に河北省東部に其麾下主力を移動し、一月二十日前後概ね兵力の集結を終つたものゝ樣である。

二　熱河省內の軍情

湯玉麟は、自己保存の必要上、反滿抗日の決心を固むるや、十月二十八日學良に對し、全軍一致して日滿軍の攻擊に抵抗すべき旨打電すると共に、一方著々として戰備を整へ、開魯淩源及建平に堅固なる陣地を構築した。又南京政府は一月より湯に對し軍費を支給する事にし、極力抗日を慫慂した。

而して熱河正規軍は、步兵四ヶ旅騎兵三ヶ旅の他、若干の特科部隊で、其兵力約二萬內外である。但し此內步兵一ヶ旅騎兵二ヶ旅は土著軍であつて、反湯的色彩が濃厚である。

此他湯は自己擁護の爲自衞軍を組織して居る、其兵力は約一萬二千であつて、相當の戰鬪力を有して居る。

義勇軍は既述の如く滿蒙各地より竄入せるものであつて、總數四萬二千に及び、其主なるものは吉林省より竄入せる馮占海（兵力一萬五千にして最も勢力がある）、李海靑、鄧

文等である。

之等義勇軍と、南京政府との間には固き提携が成立して居つて、目下軍資彈藥等を、北平及南方より補充して居る。而して本年一月上旬間魯に於て義勇軍の軍事會議を開催して、左の如き反滿抗日の軍事行動を議決した。

議決事項要旨

1 第四軍團(劉桂堂)は洮南を攻略し、四洮鐵道を破壞す。

(註 劉桂堂は歸順の意あるものゝ如く劉は此行動を實行せず却て開魯を窺ひあるものゝ如し。)

2 第五軍團(劉振東)は星隆鎮を經て打通線を破壞す。

3 第七軍團(何清明)は達爾罕王府方面より進んで鄭通線を遮斷す。

4 第九軍團(馮占海)は阜新方面より彰武、黑山を攻擊し日滿軍の後方を遮斷す。

5 鄧文軍は崔興武第九旅と協力し開魯を守備し各軍の破壞作業の進展を俟つて通遼を占領す。

6 總豫備隊は開魯に位置す。

以上の計畫に基き、一月中旬一部は其行動を開始したが 關東軍の爆擊に遭ひ、其出鼻を挫かれた觀がある。

三 張學良の對熱河軍事行動

張學良は事變發生以來、滿洲の擾亂は專ら義勇軍の操縱に依つて居たが、支那內外の情勢は、學良糾彈の聲喧しく、加ふるに十一月中旬南京に於ける蔣張兩者の會見後、徹底的抗日に決したので、十一月二十日旅長會議を開き、北支軍の改編、整理、移駐、軍隊區分、義勇軍の積極的援助、熱河及山海關方面防備の充實等を討議した。

次で十二月上旬、滿洲里事件(蘇炳文の叛逆)解決するや、日滿兩軍の熱河及關內に對する進攻を恐れ、該方面の戰備を嚴にすると共に、十二月四日其正規軍の熱河進入と關內移動に關する命令を發し、部隊は十二月十日其行動を開始した。而して十二月中旬行は

れたる華北將領會議と、三中全會の抗日決議以來、其行動逐次活潑となり、一月一日の山海關事件は益〻之を刺激して、一月二十日頃に於ては既に步兵四ヶ師三ヶ旅と騎兵二ヶ旅を移駐した。

斯くの如く兵力が次第に增加したので、意氣驕れる無智の支那兵が、其上司の指導に從ひ、亂暴狼藉を働くのは當然で、其結果として治安の維持はもとより、挑戰的行動に迄發展し、更に對外對內兩政策の見地より、益〻之を助長せしむるの傾向が大である。

熱河及滿支國境方面の兵力分布の狀態は附圖第二の如くである。

六　結　論

以上の叙述に依て明瞭なるが如く、滿洲國內は熱河省及滿支國境方面を除く他は、關東軍の奮鬪努力に依り、討伐作戰著々として進捗し歸順するもの亦多く、治安の維持將に完からんとし、建設の作業諸所に起り、平和の春光悠々として漲り、滿洲國民は心から新政を謳歌して居る。

然るに舊軍閥たる張學良及目下に於ける、南京政府の頭首たる蔣介石は、或は義勇軍を煽動し、或は大兵を移駐して熱河を根據として滿洲國內の擾亂を企圖するのみならず、我に對して挑戰的行動をすら敢てしつゝある。

是れ一に、彼等一流の自己擁護の窮餘の策動ではあるが、一面には之に依り聯盟の空氣の好轉と、第三國の干涉を呼ばんとする得意の以夷制夷政策のあらはれであることは、既に述べた如くである。

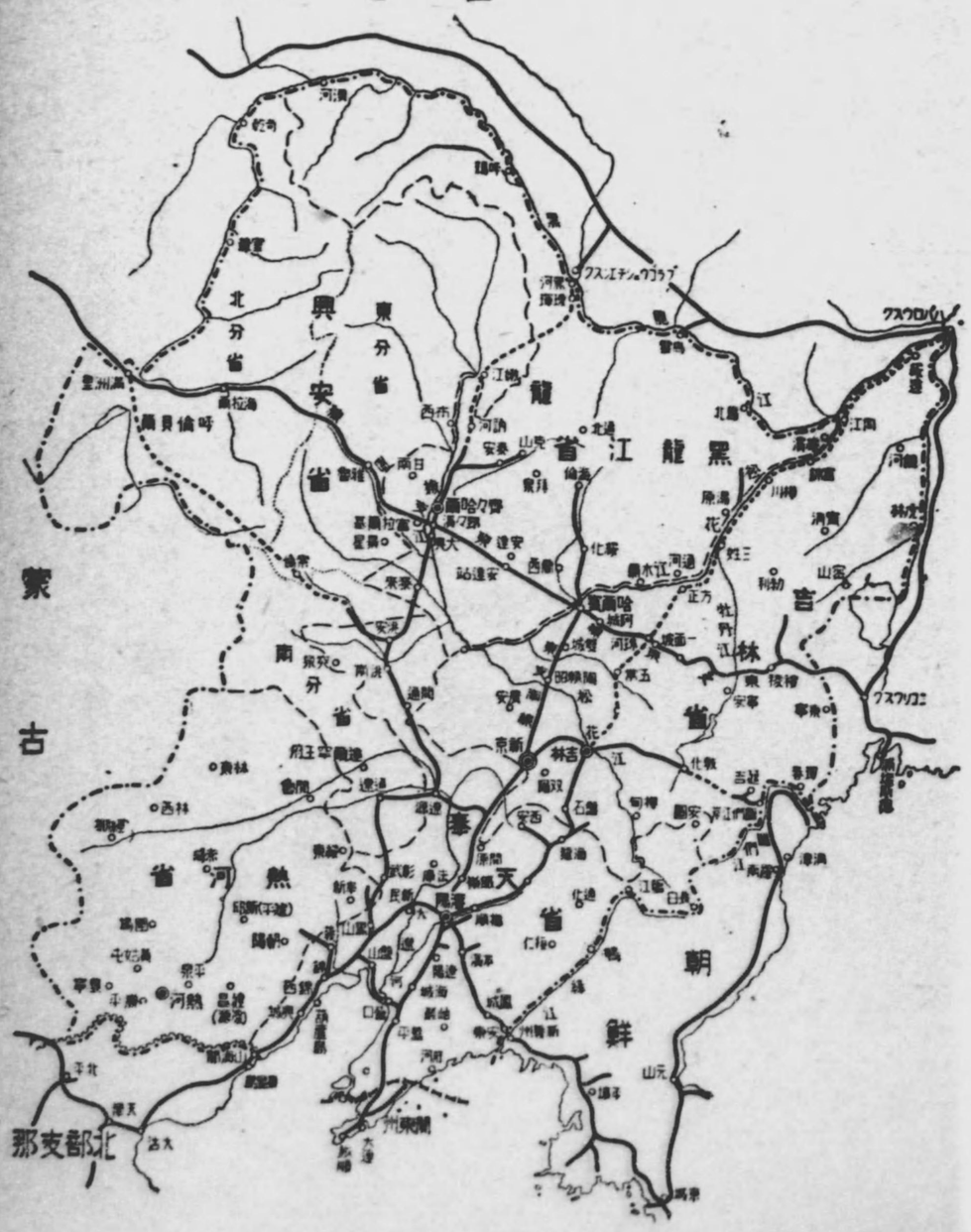
然しながら彼等の政策行動が如何であらうとも、滿洲國の獨立は、嚴然たる事實であつて同時に滿洲國が偉大なる發展進步を爲すことにより、極東の平和全く延いて世界の平和確立に貢獻すること大なるべきは、吾人の確信して止まざる所である。故に事苟も滿洲國の獨立を脅かし、又は其治安を紊亂せしめんとするが如きものたるに於ては、其何人たるを問はず、敢然として之を排除しなければならぬ。

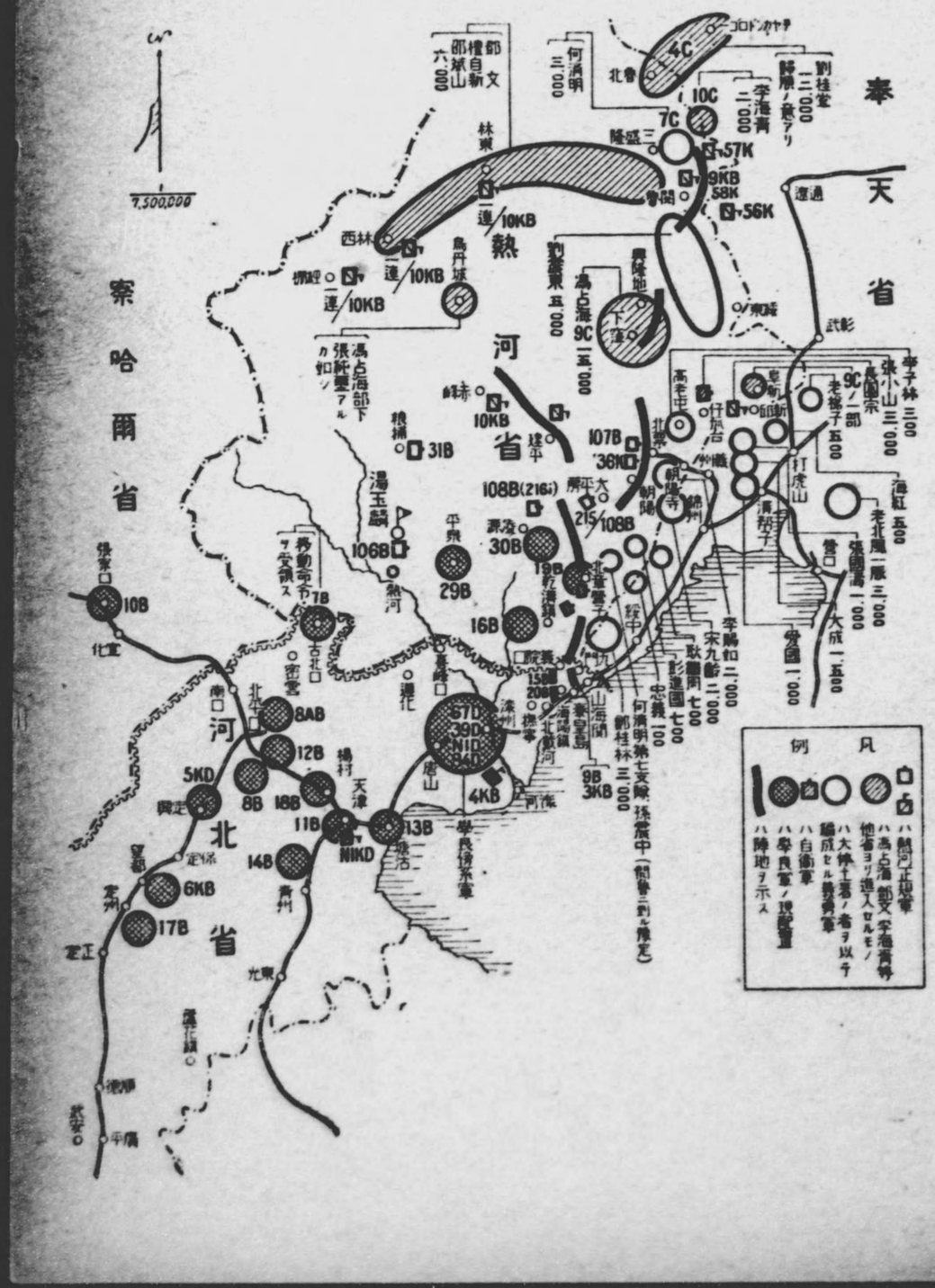
思ふに熱河省が滿洲國內の一州たるは之を過去の歷史に見るも、又建國に際しての獨立

宣言及同年三月十二日の對外通牒に徴するも明なる事實でる。然るに彼等は熱河を攪亂するのみか更に之を根據地として滿洲國の治安を妨害せんとし、湯玉麟の如きに至つては、身滿洲國參議府の副議長たる重責に在りながら、尚反滿抗日の態度に出づ、斯くの如きはとりもなほさず滿洲國の反逆者であつて、之を誅するは庶民の患を除く所以、一日の早きを要するのである。而して背後に在つて之を援助使嗾して、兵を進むるのみか更に進んで挑戰的行動を敢てする張蔣が輩の如きは東洋平和の攪亂者と謂ふべきである。

附圖第一

滿洲國要圖



附圖第二

熱河及北支那方面反滿軍並支那軍配置要圖